

解析学2 演習8 解答

解答 8.1.

(1) $P(x) = 0$ の場合は明らか. $P(x) \neq 0$ とし, $N = \deg(P)$ とする. $e^x = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{x^n}{n!}$ より,

$$e^{x^2} = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{x^{2n}}{n!} \geq \sum_{n=0}^{N+1} \frac{x^{2n}}{n!}$$

であるから,

$$|P(x)f(x)| = \frac{P(x)}{e^{x^2}} \leq \frac{P(x)}{\sum_{n=0}^{N+1} \frac{x^{2n}}{n!}} \rightarrow 0$$

(2) n に帰する数学的帰納法により示す.

$n = 0$ の場合は明らか.

$n = 1$ の場合, $f'(x) = -2xe^{-x^2} = -2xf(x)$ なのでよい.

$n = k$ のとき, $f^{(k)}(x) = P_k(x)f(x)$ とすると,

$$f^{(k+1)}(x) = P'_k(x)f(x) + P_k(x)f'(x) = (P'_k(x) - 2xP_k(x))f(x)$$

となり, $n = k + 1$ でも成立することが分かる.

(3) $n = 1$ のときを示す. 任意の $i, j \in \mathbb{N}$ に対して,

$$\left| \left(\frac{d}{dx} \right)^i e^{-x^2} \right| |x|^j = |P_i(x)x^j| e^{-x^2} \rightarrow 0 \quad (x \rightarrow \pm\infty)$$

なので, $\sup_{x \in \mathbb{R}} \left| \left(\frac{d}{dx} \right)^i e^{-x^2} \right| |x|^j < \infty$ である. i, j は任意なので, $e^{-x^2} \in \mathcal{S}$ である.

$n \geq 2$ のときも同様.

解答 8.2. 1次元 Lebesgue 測度を μ で表す.

次の事実に注意する; Lebesgue 測度は平行移動不変(すなわち, $A \in \mathcal{B}(\mathbb{R})$ と $x \in \mathbb{R}$ に対し $\mu(A+x) = \mu(A)$) であり, 反転不変($\mu(A) = \mu(-A)$) である. (ちなみに, \mathbb{R} 上の平行移動不変な測度 ν で, 任意のコンパクト集合 $K \subset \mathbb{R}$ に対し $\nu(K) < \infty$ となるものは Lebesgue 測度の定数倍, という事もわかる)

まず, $f = \chi_A, g = \chi_B$ ($A, B \in \mathcal{B}(\mathbb{R})$) の場合に問題の等式を示す. このとき,

$$f(x-y)g(y) = \chi_A(x-y)\chi_B(y) = \chi_{-A+x}(y)\chi_B(y) = \chi_{(-A+x) \cap B}(y)$$

$$f(y)g(x-y) = \chi_A(y)\chi_B(x-y) = \chi_A(y)\chi_{-B+x}(y) = \chi_{A \cap (-B+x)}(y)$$

なので,

$$\begin{aligned}
 \int_{-\infty}^{+\infty} f(x-y)g(y) dy &= \mu((-A+x) \cap B) \\
 &= \mu((-A) \cap (B-x)) \\
 &= \mu(A \cap (-B+x)) \\
 &= \int_{-\infty}^{+\infty} f(y)g(x-y) dy
 \end{aligned}$$

となり, 求める式をえる. ただし, 2行目で Lebesgue 測度の平行移動不変性を, 3行目で Lebesgue 測度の反転不変性を用いた.

次に, f, g が単函数の場合を示す. $f = \sum_{i=1}^n a_i \chi_{A_i}, g = \sum_{j=1}^n b_j \chi_{B_j}$ ($a_i, b_j \geq 0, A_i, B_j \in \mathcal{B}(\mathbb{R})$ ($i, j = 1, \dots, n$)) とすると,

$$\begin{aligned}
 \int_{-\infty}^{+\infty} f(x-y)g(y) dy &= \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n a_i b_j \int_{-\infty}^{+\infty} \chi_{A_i}(x-y) \chi_{B_j}(y) dy \\
 &= \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n a_i b_j \int_{-\infty}^{+\infty} \chi_{A_i}(y) \chi_{B_j}(x-y) dy \\
 &= \int_{-\infty}^{+\infty} f(y)g(x-y) dy
 \end{aligned}$$

となり, 求める式をえる.

f, g が $\mathcal{B}(\mathbb{R})$ -可測な非負値函数の場合は非負単函数列 $\{f_n\}_{n=1,2,\dots}, \{g_n\}_{n=1,2,\dots}$ で, $f_n \uparrow f, g_n \uparrow g$ ($n \rightarrow \infty$) となるものが存在する. 単調収束定理により,

$$\begin{aligned}
 \int_{-\infty}^{+\infty} f(x-y)g(y) dy &= \lim_{n \rightarrow \infty} \int_{-\infty}^{+\infty} f_n(x-y)g_n(y) dy \\
 &= \lim_{n \rightarrow \infty} \int_{-\infty}^{+\infty} f_n(y)g_n(x-y) dy \\
 &= \int_{-\infty}^{+\infty} f(y)g(x-y) dy
 \end{aligned}$$

となり, 求める式を得る. ただし, 2行目で単函数の場合の結果を用いた.

一般の場合は, 非負値函数の場合の結果により,

$$\int_{-\infty}^{+\infty} |f(x-y)g(y)| dy = \int_{-\infty}^{+\infty} |f(y)g(x-y)| dy$$

となるが, 仮定より左辺は有限なので, 右辺も有限. したがって, $f(y)g(x-y)$ が y の函数として可積分であることがわかる. あとは $f = f_+ - f_-, g = g_+ - g_-$ と分解して計算すればよい.

解答 8.3. 関数 $f \in C(\mathbb{R})$ を

$$f(x) = \begin{cases} e^{-1/x} & (x > 0) \\ 0 & (x \leq 0) \end{cases}$$

と定義すると、関数 ψ は $\psi(x) = f(1-x^2)$ と書かれる。よって $f \in C^\infty(\mathbb{R})$ であることを示せば、 $\text{supp}\psi = \{x \mid |x| \leq 1\}$ より $\psi \in C_0^\infty(\mathbb{R})$ が従う。

すべての整数 $n \geq 0$ に対して $f \in C^n(\mathbb{R})$ であり、かつ

$$f^{(n)}(x) = \begin{cases} P_n\left(\frac{1}{x}\right) e^{-1/x} & (x > 0) \\ 0 & (x \leq 0) \end{cases}$$

であることを示す。ただし P_n は $P_0(t) = 1, P_{n+1}(t) = t^2[P_n(t) - P_n'(t)], (n \geq 0)$ により定義される多項式関数である。 $x \neq 0$ での成立はすぐに分かるから $x = 0$ における微分可能性を示す。 $x = 0$ において f が連続で

$$\lim_{x \uparrow -0} f^{(1)}(x) = \lim_{x \downarrow +0} f^{(1)}(x) = 0$$

が成り立つから、 f は $x = 0$ においても微分可能で微係数は $f^{(1)}(0) = 0$ である。よって $f \in C^1(\mathbb{R})$ が示された。 n に関する数学的帰納法により $f^{(n)}(0) = 0$ を示すことも同様に行われる。

解答 8.4.

(1) 正しくない：反例を示す。 $f = \frac{1}{1+x^2}$ とすれば $f \in C^\infty(\mathbb{R}) \cap L^1(\mathbb{R}) \cap L^\infty(\mathbb{R})$ 。演習 7.3. より $g = \psi$ とすれば $g \in \mathcal{S}$ である。このとき

$$\begin{aligned} f * g(x) &= \int_{|y| \leq 1} \frac{1}{1+(x-y)^2} \psi(y) dy \\ &\geq \frac{1}{1 + \max\{(x-1)^2, (x+1)^2\}} \int \psi(y) dy \end{aligned}$$

$\int \psi(y) dy > 0$ であるから、 $x \rightarrow \infty$ のとき $|x^3 \cdot f * g(x)| \rightarrow \infty$ となる。従って $f * g \notin \mathcal{S}$ 。

(2) 正しい： $f \in C_c(\mathbb{R}) \subset L^1(\mathbb{R})$ と $g \in \mathcal{S}$ より、任意の整数 m, n に対して、

$$\left| x^m \cdot \frac{\partial^n}{\partial x^n} f * g(x) \right| \leq \int_{\text{supp}(f)} |f(y)| \cdot |x^m| \cdot \left| \frac{\partial^n}{\partial x^n} g(x-y) \right| dy$$

が成り立つ。 $\text{supp}(f)$ はコンパクトなので、この上で $|x|^m \leq P(y-x)$ を満すような多項式 P が存在する。 $g \in \mathcal{S}$ より $|P(x-y)| \cdot \left| \frac{\partial^n}{\partial x^n} g(x-y) \right| \leq M$ となるような定数が存在するので、 $|x|^m \cdot |D_x^n f * g(x)| \leq M \|f\|_1$ が成り立つ。従って $f * g \in \mathcal{S}$ 。